

信濃教育

巻頭言

マニユアル

「最近の若者はすぐにマニユアルを欲しがらる」などと言われる。問題や障害が生じたときに、その解決策を自分で考えずに、誰かに方法を示してもらいたがる、ということを批判しているのだらう。「指示待ち人間」も類義語だらう。

少し前になるが、信濃教育会教育研究所の연구원と議論したことがある。議論と言うより雑談に近いが、楽しい時間であった。修学旅行が話題になった。教育研究所は、子どもたちの願いや求めは何なのか、が関心事なので、今まであまり考えることのなかったであらう、修学旅行は何のために行うのかが話題になったのである。

そう言えば、目的地はどこにするか、コースはどうするかが学年会の主たる話題で、修学旅行はなぜ行くか話し合ったことないよね、業者選定の時点で目的地やコースもほぼ決まっているしね、などなど、今まで当たり前だったことが、연구원にとっては当たり前でなくなっているようだ。

研究生の話は行動細案に移った。私も経験しているのだが、修学旅行にはしおりが必需品で、その中に行動細案がある。日程が細かく記され、どの係がどこで何をするのか、詳細に記されている。例えば、昼食時には食事係が「いただきます」の号令をかける、のように。担当の職員にとって行動細案作りは骨の折れる仕事である。子どもたちが自分で考え、その時々に必要な行動をとることよりも、あらかじめ決められた仕事を間違えなくこなすことが重要なのである。行動細案は一種のマニユアルといっている。では、修学旅行ではどのような力をつけようとしているのだろうか。子どもたちが主体的に考え、自律的に行動する力がつくような修学旅行は、どうしたら実現できるのだろうか、と研究生の議論は深まっていた。

行動細案は私も当たり前だと思つて作つてきたように思う。しかし研究生の話聞きながら、私は私の書いた紙面の上で、子どもたちをコントロールしようとしていたのではないかと思ひ始めた。もつと、他に方法がなかったのだろうか。詳細に行動を規定するのではなく、他の方法で安全な修学旅行を実現できなかったのだろうか。今となつてはもう遅いが。

最近の若者は、と批判する前に、学校教育の実践者として、考えるべきことがあったのかも